子供でもOK？

peach-pit

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子供でもＯＫ？

【Ｎコード】

Ｎ２５４２Ｄ

【作者名】

ｐｅａｃｈ－ｐｉｔ

【あらすじ】

事件に興味ありの女子高校生、金本南。南の好きな人坂本光一。デートの途中、変な男に興味をもち、事件に巻き込まれてしまった南。変な薬を飲まされ・・・？

運命を変えてしまう事件

私の名は金本南。女子高校生。成績優秀、運動神経抜群。結構モテる。こんな性格有り得ないよね。自分でも驚いてますッ。

「ねー光一！今日私の誕生日なのッ！！」
「で？」
「もー。分かってないなー。今からどっか行こ？」
「・・・デートってこと？」
「へ？う・・・うん。そゆこと」
「ふ～ん。ま、いいや。行くか」
「ありがとう☆」

彼は坂本光一。私の好きな人。だけどなぜか友達からは私達の関係を：ライバル：って言われてる。彼も成績優秀、運動神経抜群。結構かっこいい。私と張り合ってるからライバルになってしまった。

と。いうことで、今私達は遊園地に来ている。
「うわぁ！すっごい行列！！」
「今日は土曜日だからな」
「・・・イヤだった？」
「別に。暇だったし。ってか、今日誕生日なんだろ？楽しめよ」
「うん＾＾。ありがと」
光一は　ニコッ　と笑ってくれた。
可愛い笑顔♪
私は光一の笑ったとこが好き。
だからずっと笑っててほしいなー・・・。
私達は絶叫マシンが大好きだから超絶叫のジェットコースターに５

回も乗り、1日が終わった。
帰り、
「今日はありがとね」
「別にいーよ」
その時、私の目の前を男の人が通った。
黒い服にサングラス。
・・・いかにも怪しい。
私は結構事件が好きだ。
いつか刑事か探偵になりたいと思うこともある。
「ゴメン光一！先帰ってて？」
「どうしたんだよ」
「ちょっと用事！」
私はそう言って男を追い駆けた。
振り返ると光一は私の名前を呼んでいた。
・・・ゴメンね光一。
今日は楽しかったよ。
ありがとう。

私は男を追い駆ける。
もう一人の男と話している。
よく見ると、金を渡している。
こりゃすごいなー・・・。
初めて見たぁ。
私の心臓は興奮していた。
ガサッ
背後から誰かが近寄ってきた。
私が振り返った瞬間
バキッ
頭を殴られた。
私は気を失いかけだった。

その時背後から来た人に変な薬を飲まされた。
私は気を失った。

子供になっちゃった?!

どれぐらい経っただろう・・・。

体が動かない・・・。

「・・なみー!み・・みー!みなみー!」

私を呼ぶ声がする・・・。

誰?

その人は私の存在に気づいた。

「大丈夫か?血が出てる・・・。しっかりしろッ!」

私は意識を取り戻した。

「ン・・・」

「大丈夫か?」

その人は私を抱き起こしてくれた。

よく見るとそれは光一だった。

「こう・・・いち?」

「え?なんで俺の名前しってんの・・・?」

え?何言ってるの?

名前知ってるのは当たり前じゃない。

「何言ってるの?当たり前じゃない」

「頭打たれておかしくなっちゃったのかな・・・。お嬢ちゃん名前は?」

・・・へ?

お嬢ちゃん??

私が?

¨ 頭打たれておかしくなっちゃったのかな¨ ・・・って!

あんたがおかしいんじゃないのッ?!

「何言ってんの光一!あたしだよ。南だよ!」

「・・・ハハハハッ。君は南なんかじゃないよ。南は高校生なんだからさ☆」
光一・・・。
私・・・どうしちゃったの・・？

「まぁ。ひとまず俺んち行くか」
「え。えぇぇぇえ？！」
「何驚いてんだよ。ほら、行くぞ」
私は光一に抱きかかえられながら光一の家に連れて行かれた。

～ｉｎ光一家～

私は光一に抱きかかえられたまま部屋に入る。

・・・久しぶりだな。
最後に光一の部屋に入ったの小４だったな・・・。
あの頃は普通に遊んでたのに・・・。
今は・・・。

「これ着な」

光一はそう言うと私に子供用の服を渡す。

子供用・・・？
どうして？
私高校生だよ？？

光一は部屋から出て行った。

まぁ・・・。

着てみるか。

着てみると、なぜかピッタリだった。
・・・有り得ない。
どうして・・・？
私はとっさに部屋にあった鏡を見る。
よく見ると私の体は小４ぐらいになっていた。

・・・・うそぉんッ！！

なんで？！
なんで体が小さくなったの？！
だから光一私のこと分からなかったんだぁ・・・。
でも・・・、分かってほしかったな・・・。
こんな姿になっても私のこと・・・、分かってほしかったな。

ガチャッ
光一が部屋に戻ってきた。

「おっ！ピッタリじゃーん♪よかった。小４の服捨てなくて」

どんだけ昔の服置いてんねん！

「そういやさ、お嬢ちゃん名前は？」
光一はベッドに座る。
私も座った。

・・・どうしよ・・・。
やっぱり名前・・・変えなきゃダメだよね・・・。
なんて名前にしよ・・・。

私は部屋をキョロキョロと見渡した。
でも参考になるような名前はなかった。
・・・こうなったら！
「私は金村美奈子！南お姉ちゃんのいとこなんだ」
「あ。そうなんだ。アイツいとこいたんだ・・・」
・・・ふー。
なんとかごまかせた・・・。

「美奈子ちゃんお菓子いるか？」
「う・・・うん」
やっぱり子供っぽくしなきゃね。

私はパクパクお菓子を食べる。

・・・でも、どうして子供になっちゃったんだろ・・・。
さっきの男が関係あるのかな・・・。
そういえば・・・、かすかにさっき変な薬を飲まされた記憶がある・・・。
もしかしてその薬に子供になる作用が入ってたのかな・・・。
そうだとしても、さっきの男はどこに行ったかなんて分かんないし・・・。
どうしよう・・・。

「美奈子ちゃん？」
「は・・・はい？！」
「どうしたの？難しい顔して・・・」
「な・・・なんでもないよ。気にしないで」
「うん・・・」

バレたらヤバいよね・・・。

たぶん・・・、
私が男どおしのお金の取り引きを目撃してしまったから始末しようととどめに毒薬を飲ませた。でも、その薬には子供になってしまう作用が含まれていた。
・・・と言うことかな。

へへッ
ちょっと探偵気分♪

あー。
こんなこと言ってる場合じゃないよ。

・・・これからどうしよ・・・。

再び女子高生に

次の日、
私と光一は光一のいとこ;　さとし;　のパーティに誘われ、会場に行った。

「わぁ！すごい！！」
私は少し興奮気味だった。

・・・こんなことしてる場合じゃないのに。

「来てよかったな」
光一が子供のような笑顔を見せる。
「う・・・うん」

向こうから男の人が近づいて来た。
「やぁ。光一久しぶり」
「おーさとし」
この人がさとしかぁ。
はじめてみた。
「君が美奈子ちゃん？」
「は・・・はい」
さとしはニコッと笑う。
「僕はさとし。よろしくね」
「よろしく。さとしお兄ちゃん」
・・・いちお;　お兄ちゃん;　って言っといたほうがいいよね。

「それにしてもさとしん家はすげぇなぁ」
「ハハッ。そんなことはないよ」

「さとしお兄ちゃんお金持ちなの？」
「うーん・・・。まぁ親父が社長なだけだよ」
す・・・すごい・・。
お父さんが社長なんてうらやましい・・・。

数分後、
さとしが私にケーキを持ってきてくれた。
「はい。どーぞ」
「ありがとう。わぁ美味しそう♪」
私はケーキをパクパクと食べる。

・・・ホントに子ども扱いなんだな。
そう実感させられる。

ケーキを食べ終わると、
ドクンッ
急に胸が熱くて苦しくなった。

「うっ」

声が漏れてしまった。

「どうした？」
光一が心配してくれる。
「な・・・なんでもない・・・」
「苦しんでるじゃん！なんでもなくないよ！！」

・・・どうしてこんなに苦しいの？

「わ・・・私・・・トイレ行って来る」

私は光一のもとから逃げるようにトイレに向かった。
「美奈子ちゃん！」
私は光一のことはお構いなしにトイレに向かった。
・・・苦しい。
・・・胸が熱い。
それから何秒か経つと私は気を失ってしまった。

「ン・・・」
私は目を覚ました。
そっか・・・。
私、気失ったんだっけ・・・。
私は起き上がると鏡を見た。
するとそこに映っているのは女子高生の姿の南だった。
「・・・え？どうして戻ったの？！」
私は驚きながら考える。
・・・もしかして、あのケーキに何か入ってたのかな・・・？
そういえば、あのケーキかすかにお酒の匂いがした。
もしかしてお酒を飲むと元の姿に戻るのかな。

まぁ・・・。

なんにせよ、戻れてよかった。

真実と幸せ

私はトイレから出て、会場に戻った。
そしてさっき食べたケーキの匂いをかいだ。

・・・やっぱり、お酒の匂いだ。
この体質はお酒の成分により元に戻るんだ。
・・・でも、完全に戻ったのかな。

「あれ・・？南??」
背後から男の人の声がする。

「光一？どうしたの??」
「なんでココに?」
「何言って・・・」
・・・そっか。
私今子供じゃないんだ。
「ちょ、ちょっと私のいとこに招待されたの」
「そっか」

光一はそう言うと私の腕を引っ張り、どこかへ連れて行かれた。
連れていかれたのは誰もいない廊下だった。

「どこ行ってたんだよ」
「へ?」
「あのデートの後、探したんだぞ」
「・・・ゴメン」
「携帯にも出ねーし・・・」
出れる訳ないよッ!

声は子供だし、光一のそばにずっといたんだからッ！！

「ちょっと・・・事件に巻き込まれちゃって・・・」

「事件？」

「うん・・・」

「で。大丈夫なのか？」

「ココにいるんだもん！大丈夫☆」

私は光一にピースをした。

光一は私を抱きしめた。

「こう・・いち？」

「無事でよかった・・・」

「心配してくれてありがと」

「おー」

今までのこと全部言いたい・・・。

でも光一には全て言えないよ。

ゴメンネ・・・。

＜＜ただいまよりダンスを始めます。踊りたい方はどうぞ踊り下さい＞＞

会場内に放送が響く。

「南。踊ろーぜ」

「え？！無理だよ。私踊った事ないし・・・」

「大丈夫。俺がフォローするから」

光一は私の返事も聞かず、踊りだした。

このまま・・・、女子高生ならいいのに・・・。

私はそう思った。

でも無理なんだ・・・。

もうすぐきっと子供に戻る・・・。

時間なんて・・・止まってしまえばいいのに・・・。

そう思うと涙が出てきた。

「南？」

光一は私が泣いているのに気づいたのか、服の袖で涙を拭った。

「どうした？」

「・・・やだ」

「え？」

「光一とこのままでいたい・・・。またあの姿になるなんてやだ！」

私は本音を言ってしまった。

「あの姿・・・？」

もう・・・言っちゃおっかな・・・。

どうしよ・・・。

すると、

ドクンッ

また胸が熱くなり、苦しくなった。

「うっ」

声が漏れてしまった。

「南？どうした？！」

「こう・・・いち・・・・」

・・・苦しい。

伝えなきゃ・・・・。

「私ね・・・あの日・・・お金の取り引き現場を目撃して毒薬を飲まされたの・・・。でも・・・ね、その毒薬には子供になってしまう作用が含まれていたの・・・・。それ以来私の姿は子供・・・・。仮の名前が‼ 美奈子‼ ・・・・。光一のそばにいた女の子は・・・・私・・・なの・・・・」

「・・・美奈子ちゃんは南？」

私は静かにうなずく。

「信じられないかもしれない・・・ケド・・・、本当の話・・・なの。今、元に戻ったのはあのケーキにお酒が入っていて、そのお酒の成分で元に戻ったの・・・・。でももうすぐその成分が切れる・・・・。子供に戻っちゃう・・・・」

「信じるよ。南のことは・・・・。今まで信じあってきただろ？」

「ありがと・・・・。光一・・・・」

「もうしゃべるな」

最後に・・・この姿で‼ アレ‼ を伝えたい・・・・。

「光一・・・・」

「ン？」

「好き」

「大好き」
「俺・・は・・・」
光一が言いかけたその瞬間、私は気をうしなった。

「・・・なみ！み・・・み！みな・・・！南！！」
私は誰かが私を呼ぶ声で目を覚ました。
見ると、子供の姿に戻っていた。

「南」
「こう・・・いち？」
目の前には光一がいた。

「南。俺も好きだ」
「・・・子供でもいいの？」
「ああ」
私は涙が溢れてきた。
「光一！ありがとぉぉぉお」

私は光一に抱きついた。

光一・・・。

だぁい好きッ！！！！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2542d/

子供でもOK？

2011年1月13日14時25分発行